
黒伯爵の妃

紫月 香夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒伯爵の妃

【Nコード】

N3057Y

【作者名】

紫月 香夜

【あらすじ】

戦場では負け知らずという、常に敵を殲滅する魔將軍ガレリウド。彼が主君と仰ぐガレヴァーン侯爵から新たな命令を受ける。

強大な敵を迎え撃つ戦かと思っていたが、それは「妃を娶って子を為せ」という命令。

娶るまで戦場に行くことを禁じられ、憤怒していた所に一筋の希求の光が届く。

それは異世界からで、絶望の余りに自害しようとしていた人間の娘と出会う。

話すうちに興味を抱き、2000年ぶりに28番目の愛妾として初めて人の娘を娶る。
魔族と平安貴族娘の寵愛話。

設定

ガレリウド・グレイム

伯爵級の魔族。年齢は5000歳以上。

戦場では負け知らずで殲滅將軍、貴族の中では黒伯爵という通名を持つ。

黒髪、黒目、190?、90?、日焼けした浅黒い肌、筋肉質。魔術を使うより、武器を振り回す方が好きという生粋の軍人。

力だけなら公爵級の魔族であるが、爵位に興味がなく軍団を任される折に伯爵の爵位を授けられる。

愛妾を27人抱えているが、最後に27人目を迎えたのは2000年前。

主君であり師父にも当たる侯爵に妃を見つけて来いと命令される。

中宮香子

平安貴族の娘。年齢は19歳。

本名は橘香子。たけはなのかし

帝の側室になるべくして蝶よ花よと育てられる。

14歳で入内して帝の寵愛を受け中宮となつて一女を産むが、後に帝が崩御し、内親王も病で亡くなる。

悲しむ間もなく、政略結婚に利用される身に絶望を覚えて自害しようとする。

黒髪、黒目、157cm、48kg。

のんびりおっとりした性格だが、言いたいことははっきり言うタイプ。

マデウス・ガレヴァーン

侯爵級魔族。年齢は30000以上と推定される。

戦場では鬼神と恐れられた魔將軍だが、老齡により前線は若い魔

族に任せて本陣で統率と命令を下している。

衰退気味と言いながら、力は計り知れず、配下を上手く動かす知将。

戦争孤児で生き残った当時少年魔兵とも言えるガレリウドの才を見出し、手元に置いて鍛え上げた。

白髪、紅目、187?、79?。

琴式部

藤壺中宮の女房。年齢は32歳。

琴の名手であり、家事も、和歌の文才なども多才稀なる人。既婚済みだったが、宮仕えを選び後に離縁する。

ほわほわとしている主に小言を聞かせるのが日課。

黒髪、黒目、160cm、51kg。

エンデシリシカ

高位魔族の娘。ガレリウドの27人の愛妾のうちの一人。

戦場で魔法を駆使して闘うことが好き。

紅髪、紫目、180cmの長身ながらダイナマイトボディ。

高圧的で自信過剰、好戦的な性格をしている。

レヴィン・ローゼルグ

伯爵級魔族。ガレリウドと同等の地位にある。

戦場ではマデウスの後継とまで言われるほどの知將軍。

罾や計略を謀るのを得意としており、罾のためなら味方をも殺す冷徹な面も持つ。

濃茶髪、緑目、褐色の肌、188?、77?。

ルフィア・ネイ

公爵級魔族の娘。

ガレリウドの抱える27人愛妾のうちの一人。

魔力の生成力が極端に低く、供給しないと肉体が減ぶため、ガレ
リウドが定期的に面倒を見ている。

かなりの猫かぶりで、嫉妬深い性格。

金髪、青目、童顔、150?、41?。

1・命令

その日、ガレリウド・グレイム伯爵は不機嫌を露わにしたまま、石畳の回廊に靴音をいつになく早足に響かせて歩いた。

回廊で話し込んでいた下級貴族や、伯爵とお近づきになると声をかけようとしていた貴婦人も、一様に怒りを帯びた様子に、只事ではない気配を察して道を開ける。

戦場に出ればガレリウドの後にはぺんぺん草すら何も残らないと有名で、ついた渾名は「殲滅將軍」だの、「黒伯爵」だのと呼ばれている。

ガレリウド自身、その渾名は好んでいないわけではない。

戦に勝ち続ける美德は、己が仕える閣下の戦功として認められるのだから。

全ては自分に戦の才能を見出し、引き出させて生きるための目的を与えてくれた師父のためなら、これからも戦勝をもぎ取って見せる。

そう、それがいつもの命令だった。

——しかし、今日ばかりは違った。

豪華な扉の前までくると、衛兵が「謁見中です」というのも憚らず、押しのけ重い扉を半ば爆砕させる勢いで開けた。

ズガ——ン！！

響き渡る謁見の間は、粉塵を巻き上げて、怯えた先客の一本角を持つ男爵級の文官が飛び退いた。

粉塵を軽く払いながら、年老いた老爺が飄々とした笑みを浮かべて、一段高くなった台座の豪華な椅子に顎肘をついて座っている。

彼の師父であるガレヴァーン侯爵、戦場では鬼神と呼ばれていたが、このところは隠棲気味の主君である。

「また派手に壊してくれたもんじゃのう。御主の財の使い方までケチはつけぬが、この扉の修理代にばかりかけておるようでは、妃を迎えるなど出来そうにないのう」

ガレヴァーン侯爵が手を翳すと、粉塵は消え失せる。

呑気な言葉にガレリウドは収まらぬ怒りを、近くにいた文官に向けて無言で散れと命ずる。

男爵級と伯爵では、明らかに伯爵の方が力が強い。

怯えた文官は、ガレヴァーン侯爵に頭を下げると逃げるように壊れた扉の隙間から這い出た。

「追い返さなくとも、御主が扉を壊したところで、会話は全て筒抜けであるう？」

からからと笑うガレヴァーン侯爵に対し、儀礼的に腰を折るものの、ガレリウドは不機嫌のままだ。

軍装の懷より手紙を取り出し、ガレヴァーン侯爵のテーブルの前に突き出す。

「閣下、単刀直入にお聞きますが、これはどういうことですか？」

「どうということも何も、そのままの意味じゃ」

「冗談は寝るか死んでからにして頂きたい」

「死んだら孫の顔が見れぬではないか」

しれっとしてまだからかうガレヴァーン侯爵に、ガレリウドはブチっという音がしそうなほど血管を眉間に浮きだたせた。

その様子が面白かったのか、ガレヴァーン侯爵は長く立派に生やした顎鬚を撫でながら問う。

「御主は何人の愛妾を囲うておるのじゃったかのう？」

「……27人おりますが、閣下」

「そうじゃろう、そんなに抱えておるのに、不思議と子が出来ぬではないか」

「閣下が心配なさることではありません」

「心配ではない。ただ孫が見たいだけじゃ。愛妾ばかりで妃の一人も作っておらぬのは、御主だけだからのう」

はあつ、と深い溜息がガレリウドから漏れる。

27人の愛妾のうち、ガレリウド自身が惚れ込んで娶った女は居ない。

ガレヴァーン侯爵に無理やりあてがわれたり、戦場で孤児になった娘や、勝手についてきた戦好きの鬼女などが殆どだ。

彼女らを嫌うわけではない、面倒を見るといふ名目での愛妾。

彼女たちの間に何事もなかったわけではない。

身籠った愛妾も居たが、全て産まれる前に死んでいる。

殲滅將軍というのは、子どもも殲滅するのかと何度ガレヴァーン侯爵にけなされたことか。

ガレリウドがガレヴァーン侯爵から受けた命令は、妃を連れて後継者を見せろという、戦とは全く関係のない内容だった。

「御主が妃を連れぬなら、また妃候補の娘を宛がうしかないのう」

「なッ——！？ これ以上、厄介な愛妾など要りませぬ。連れて来れば良いでしょう、妃をっ！」

面倒は御免だとばかりに、フンッと息を荒げてガレリウドは身を翻した。

「三か月じゃ」

「は？」

「三か月以内に連れて来い。それまで、御主は戦場に出さぬ」
「閣下！」

横暴だ。

あまりにも、酷い仕打ちである。

戦で勝つことが喜びで、生きる意味であるのに、三か月も謹慎のような生活には身体がなまってしまふ。

翻した身を、またガレヴァーン侯爵に向けたが、もう取り合う気はないとばかりに、手を振られる。

「ほれ、さつさと探るか愛妾を口説け。次の謁見がある。御主の予定ない謁見のせいで、今日の予定全てが狂ってしまうわい」

無然としながらも、儀礼的に一礼だけすると、ガレリウドは再び身を翻した。

2・希求

侯爵邸の謁見の間から退室し、回廊をまた早足で歩く。妃を作るとなると、相応に面倒なことになる。

ただでさえ27人の愛妾同士でも嫉妬や派閥がある。

住まいを分けて通うことで血を見る争いにはならないが、ここ数百年は様子を見る程度に訪れて回るだけとなっている。

魔族という長き生の中で、己に頼らなくとも独り立ちする愛妾も居るため、妃になりたいと虎視眈々と狙う愛妾と、戦場に連れてほしいという愛妾を適当にあしらうだけに通うだけだ。

妃にするなら、それらの気性激しい愛妾を黙らせるものか、動じないものでなければならぬ。

27人の愛妾の中から選ぶとなると、これまた鼻屑だのと厄介なことになりそうだった。

『――助けて』

不意に声が聞こえた。

悲痛、諦観、絶望を秘めた声音。

戦場で縋るように紡がれる言葉と同じだが、込められた想いが憂いを帯びている。

どこに声の主が居るのかと、辺りを見渡したが、貴婦人の熱い視線と笑みが返ってくるだけで、見つからない。

空耳かと首を捻ったが、この侯爵邸で聞こえたわけではないようだ。

「黒伯爵殿。どうかしたのか？」

今度は目の前から声がかかる。

同じ伯爵級魔族のレヴィン・ローゼルグ。

戦場では策を展開して侯爵の有力な後継者候補とも呼ばれる知将。傍らには珍しく貴婦人を連れている。

淡いオレンジの色をしたドレスを着た若い娘で、目が合うと恭しくお辞儀をしてみせる。

「レヴィン……。こちらは？」

「俺の一番上の娘だが。ああ、黒伯爵殿と会うのは三千年ぶりぐらになるか。閣下の晩餐に呼ばれてね、本来なら正妻を連れる所だが面倒くさいと振られてしまったので、仕方なく娘を連れてきたのだ」

晩餐。

そつえば、妃を持つとそのような面倒なこともあったか、と心の中でばやいた。

愛妾を伴って若い頃は軍の横繋がりを深めるためだとか何とかで無理やりに侯爵に参加させられたものだ。

伯爵の爵位を承ってから戦場に近い辺境に領地を得たために、この侯爵邸に訪れるのは数年に一度だった。

戦場への通達も、戦勝の報告も全ては配下の魔将が伝書鳩の如く担っている。

「そうであつたか。……気づかぬうちに大きくなれたものだな」

「ふふ、27人も愛妾を囲う多忙な黒伯爵殿には、くれてはやらんぞ」

「そのことで侯爵閣下に文句をつけてきた所だ。妃を娶るまで戦場には出さぬとな。……危惧せずとも、そなたの娘を娶るつもりなどないわ」

ガレリウドが嘆息すると、レヴィンは面白そうに笑った。

ライバルとも言える立場にあるガレリウドが戦場に出ないとなると、全軍の統率を任されるのはレヴィンに向けられる。

大規模な戦であればガレリウドと軍を半分に分けて連携をとるものだったが、小規模程度ならレヴィンの軍団だけが戦場に行くこともあるからだ。

ガレリウドのように前線に立つて槍を振り回すことはないが、策を講じて陥れる戦を好むレヴィンにはやりと隠しもしない笑みを浮かべる。

「侯爵閣下に俺の功績を上げておく機会だな」

「好きにするがいい」

対してガレリウドに出世欲は全くもって皆無である。

敵視もしなければ、戦友というものでもない気がする。

『——助けて』

また、あの声が脳裏に流れた。

首を傾げた動作に、レヴィンが訝しそくに顔を顰めた。

「珍しく調子が悪そうだな、それほど戦場に出さないとされたのがシヨックだったのか？」

「いや。……微かに声が、聞こえただが」

「誰のだ？」

「知らぬ……」

「なんだそれは。まあ、黒伯爵殿に届く声など「殺してくれ」というようなものだろう。望み通りに殺してやれば良いだろう。——さて、レティ、そろそろ侯爵閣下が待ちくたびれているだろうから行くぞ」

からからとレヴィンが笑いながら、娘を連れて回廊を歩き出す。
ガレリウドは再び嘆息すると、侯爵邸の長い回廊をレヴィンと反対のエントランスがある方向へと歩いた。

脳裏に流れる声音はまだ続いている。

すれ違ふ貴婦人や、男爵級貴族が道を開ける中、声の主を探してみたが、その誰ともつかなかった。

「望み通りに殺す、か……」

レヴィンの言葉を反芻しながら、侯爵邸のエントランスを出ると一人呟いた。

希求の声は、確かに「殺してくれ」とでも言っているような悲痛の叫びだ。

どこの誰が呼びかけてきているのかは謎ではあるが、このまま呼びかけ続けたら睡眠妨害も良いところだ。

そのまま領地に戻ることなく、ガレリウドは転送陣のある門へと足を向けた。

3・藤壺の君

「香子さま、春宮さまから御文が届きましたよ」

下げた御簾の隙間から、使いに出していた女房の琴式部が、文を机に差し出した。

恋を綴った和歌が書き連ねられて、返歌を待つ文。

返歌次第で春宮の側室として即位された頃には弘徽殿に戻されるか、或いは先帝の寵姫で内親王の母として、今居る藤壺で慎ましく過ごすか。

本来なら、次期帝を振ることは天にも背くこと。

それはつまり、断れない。

返歌で春宮に嫌われるなりしなければ、この宮中からは出ることは出来ない。

しかし、うんざりした様子で溜息をついたのは、藤壺に住まう中宮香子。

左大臣家に生まれ、幼少より帝の側室として教養を身につけられた、生粋の貴族の箱入り娘。

14歳で32歳も年上の先帝の側室として女御の位で入内し、すぐに身籠ったためにあつという間に立后し、中宮まで上り詰めた。時の女性であるなら、誰もが羨むような生活が保障される。

——かのように思えた。

子を宿してから9ヶ月目に差し掛かった頃、里邸に下がって宮中を空けていた折に、先帝は突然の流行り病に伏して、そのまま崩御された。

女御として入内して、中宮となっても弘徽殿の間に住んでいた香子だったが、出産後の宮中へ戻る頃には、住居は弘徽殿ではなく藤

壺に移された。

49日の喪が明けて、先帝の弟である現帝が即位し、春宮には現帝の長子選ばれている。

それを快く思わなかった香子の父が、春宮と香子を結ばせようとしたのだ。

春宮から見れば伯父嫁にも当たる縁族ながら、この時代に於いては政治的な婚姻が物を言う。

宮中に戻って3年、内親王が3歳を迎えると、父は内親王を伊勢斎宮に選定して引き離した。

現帝の健康状態も芳しくないと聞く。

そこへ伊勢斎宮と引き離されて1年経つか、経たぬかのうちに、22歳になる春宮と、未亡人とはいえまだ19歳の香子を引き合わせたのは、政治的な目的がなければ結びつかないのも同然と言えた。藤壺で過ごす4年の間に、春宮以外に若い親王や大臣に求婚の和歌を送られたが、父は帝か春宮以外にしか取り次がぬように女房に言い含めていたのだろう。

帝の側室になるべく育てられたのだから、それが当然とばかりに。

「春宮さまからの文だというのに、浮かない顔でございますね」

琴式部は返歌の代筆をするために筆を準備し始めている。

このままいけば、父の思惑通りに事が進み、また子供を産むことを望まれる。

内親王ではなく、親王を産んで、その子が春宮に、そして帝へとなれば、父は喜ぶのであろう。

そう出来るまで、道具に成り下がるのが、香子に強いられた生の意味。

「……琴式部は、わたくしが春宮さまの側室になっても良いと思っているの？」

「あら。香子さまは本当に奥ゆかしいですね。たいそう可愛らしいのですから、きっと春宮さまにも気に入られて中宮さまとなられるでしょう。その方の世話を出来るといのは、宮仕えの女にとって一番の喜びでございます」

和歌の才能もあり、琴を弾かせれば名人という女房は、得意の琴をとって琴式部と呼ばれている。

忠実で主人を立てる言葉も、確かに悪い気はしない。

この者が、自分の女房で居てくれることを、香子は、いつも感謝している。

「そうね。……でも、わたくしは——春宮さまと結婚したいとは思っておりませぬ。きつと、生まれてくる時代を間違ってしまったのかもしれない」

物心ついた頃より、蝶よ花よと入内する身として相應しい教養を覚えさせられた。

けれど、それはいつも心が締め付けられる窮屈な想いも生んだ。父が認める帝になる人以外には、恋をしたり愛したりすることは出来ないのだと知った。

「まあ、他の女御様に聞かれたら、嫉妬されますよ」

「構いませぬ。……わたくしは、この柵から抜け出したいわ。先帝が崩御なされたのに、宮中に戻されることばかりか、また春宮さまに嫁ぐなど……」

「先帝さまのことが忘れられぬのですか？ 歳が違いすぎたのに、それほど閨が良かったのでしょうか」

「そうではありませぬっ！」

からかうような物言いをした琴式部に香子は思わず声を荒げると、

また溜息をついた。

先帝との閨は14歳という初心の身には、恐怖と悍ましさを植え付けられたもの。

この世にお産という痛みも命を落とすかと思うほどの痛みであったが、生まれた子は美しかったからまだ許せる。

けれど、閨という好きでもない相手に抱かれるだけの痛い仕打ちは、身も心も痛い。

助けてほしい。と、神社に赴いては何度も願ってみたけれど、状況は変わらない。

変えるには、自ら行動しなければ何も変わらないのかもしれない。落飾は父に見つかっては意味がないかもしれない、だが自害も宮中では認められていない。

「琴式部、返歌をお出しするのは、もう少しお待ちなさい」
「ですが、あまり待たせてしまうと、お心が離れますよ」
「少し考えたい時間が欲しいの。花見でもして心を落ちつきたいわ」
「それは良いですね。天気も良いですし、早速外出の手配をします」

筆を置きなおした琴式部は、移動のために使う青車を手配に藤壺の間から退室していった。

香子は残された文を見つめて、手に取り目を通した。

何度見ても、あまり上手とは思えない恋文。

その恋文に交じった他に、色褪せた文がもう一つ畳まれていた。何だろうと思い、文を開けば訃報を知らせる文だった。

伊勢斎宮の訃報。

それは、つまり香子が産んだ僅か4歳にも満たぬ娘が亡くなった

ということ。

文の色褪せ具合から、それがいつのことかはわからない。
愕然とし、文を見つめる視界は涙で霞んだ。

4・悲観

琴式部が戻ってくる足音に、香子は文を隠すように元に戻した。恐らく琴式部はこの文を知っているはずだ。

全ての文は琴式部が取り次ぐことになっている。

主人宛ての文を勝手に読むというのはモラルに関わるが、中には好ましくない文が混じることもあるため、そうした文は取り次がない。

檜扇で顔を隠し、懷紙で目元を拭った。

「手配して参りました」

御簾が開けられ、どうぞとばかりに促される。

急いできたのか、琴式部の十二単の裾が翻っており、いつも着付けや、身のこなしに厳しいのに珍しい。

「ご苦勞様です」

「いえ。……あら、香子さま、御髪が乱れておいでですよ」

「それは、……琴式部を待つ間に温かな陽気にうとうとして、壁に寄り掛かってしまったから」

とつさの言い訳だが、琴式部は何も言わずに香子の前髪を手櫛で整えた。

その間は顔を隠しておいたが、寝起きの顔を見られたくないという風に捉えたのかどうか、何も突っ込まれることはない。

「すぐ傍に待たせておりますから、参りましょう」

「ええ……」

促され、香子は藤壺の間を後にした。

遅れて琴式部が文を片づけて、こつそりと色褪せた文を袖に忍ばせたのを御簾越しで捉える。

ああ、やはり……彼女は知っていたのだろう。

急いで戻ってきて裾が翻っているのも気づかなかったのは、余程、あの文を見られないようにと気を揉んだからかもしれない。

琴式部を問いたただすのは簡単なことかもしれないが、そうしたことで伊勢斎宮は……娘は戻ってこないのだ。

熱くなりそうな目頭を押さえると、首を降り、また扇で顔を隠したまま用意された青車へと乗りこんだ。

花見の名目で訪れた近くの山。

もう少しで満開を迎えるのだろうか、桜の花はまだ八分咲きといったところだ。

どの木が美しく咲くのかを見て回り、気に入る木の傍で立ち止まる。

「香子さま、こちらは崖に近いですから、もう少し足場の良い所へ参りましょう」

「そうね。でも、少し疲れてしまつて……。ここで休んでいますから、琴式部はこの木よりも美しい木を探して見せてくださいな」

「そうですか？ ……わかりました。動いてはダメですよ」

念を押すような琴式部に頷きを返し、見送る。

これで暫くは……他に人は居ない。

そう辺りを見渡すと、桜の木の傍にある崖を見下ろした。

眼下には川が流れており、落ちれば小桂姿の今なら重みで命を絶つことが出来るかもしれない。

だが、中々に踏み出すというのは勇気の要るものだ。

ごくりと、喉を鳴らして深呼吸を試みた。

身を投げれば、輪廻転生に従って次に生まれてくる時は、違う形で生まれることが出来るかもしれない。

夫と呼べた存在にも先立たれ、娘にも先立たれ、残った父には道具のように使われる。

そこに、香子としての人権はないに等しい。

きらびやかな宮廷生活は女の嫉妬と、男の権力争いに帝が振り回されている。

自分の人生を、自分で決めることのできないという絶望の淵に、生きる価値は見出すことが出来ない。

助けてと願っても、願っても……誰にも理解されない。

じやりつと砂音を立てて、崖に足を踏み出した。

目を閉じれば、きつと一瞬で逝けるはず。

目を開けたときには、きつと新しい命として生まれているはず。

ぎゅつと目を閉じて、身を乗り出し、崖の大地を蹴るようにして飛んだ。

「香子さまっ!？」

琴式部の声音が落ちている身の中で聞こえたような気がしたが、意識はすう——と遠くへ沈んだ。

あの子だけは、わたくしが死んだら悲しんでくれるのかしら。

入内した頃より、仕えてくれている琴式部。

年齢差はあるものの、いつも親身になってくれていた。

時には厳しく、時には優しく、姉のような存在。

せめて、彼女にだけはごめんなさいと、一言謝っておくべきだったかもしれない。

だけど、彼女なら……他の女御さまにも、きつと気に入られる優

秀な女房となるだろう。

将来を絶望としか思えていないわたくしなどに仕えるよりも、ずっと……ずっと、出世なさる女御さまに就くことが、彼女の夢なのだから。

これ以上、縛るわけにはいかないのだ。

風を切る速度が増し、身体が何かにぶつかるような衝撃が香子に走った。

けれど、それは不思議と痛くはない。

先帝や娘は流行り病で苦しんで死んだけれど、己はこうまでも楽に死ねるものなのだろうか。

それとも死は感じる事が出来ないから、わからないだけなのか。どちらにしても香子の意識は、そこで途絶えた……。

5・声の主

転送陣から転移した先、眼下に広がるのは緑とピンクで彩られた山。

見える街並みは碁盤目上で、街自体が要塞のように連なる建物。高いビルが並ぶわけでもなく、科学の発展した機械や、魔術の発展した魔力は感じられず、文明レベルはそれほど高くないようだ。ガレリウドに呼びかけられている声の主を探すために、転移してきたものの、どうにも異世界というより異次元レベルで違うのかもしれない。

街ではなく、山の中に陣が敷かれたのだから、少なくとも山に声の主が居るのだろう。

「まさか、迷子というわけでもあるまいな……」

独白を零しながら、小さく嘆息すると辺りを見渡した。

声だけが頼りであるから、どのような姿の者なのかは見当もつかない。

具体的な場所がわからなくとも、姿がわかり、己の所有物としての印でもつけていれば、転送陣であつという間にその者の居る場所へと飛べる便利な魔法陣だが、全てが万能というわけではない。

ガレリウドは目を閉じて耳を澄ませてみる。

微かに聞こえるのは、数人の足音、トーンの高い女性と思わしき声、脳裏に流れてきていた声とはやや異なる。

ここよりも上から聞こえるようだ。

ふと、見上げれば突然視界に入ってきたのは、緋色と黒を基調にした丸くて大きなものだった。

「なっ……ん、ぐっ——!？」

それはガレリウドを避けることもなくまっすぐに向かってきていた。

何かの罾かと思い、咄嗟に帯剣していた剣の柄に手をかけたが、近づいてくるにつれて徐々にそれがはつきりとしてくる。

幼さの残る顔が黒い塊から覗けば、それが人であることがわかる。剣を握る手は自然と抱きとめる形となったが、幼い顔とは裏腹にそれは予想していたよりも重みがあった。

重みの理由が、着ているもののせいだと気付いたのは、受け止めたときの感触で気づくことになる。

黒い塊は、長く艶のある髪。

落ちてきた時に煽られた風のせいで、その髪はぐしゃぐしゃになっていたが、さらさらと真っ直ぐに地面に垂れる。

気を失っているのか、余計に重く感じる女の身。

足場の悪い場よりも平たい場の方が良いかと考え、ずしりと重い女を抱きかかえたまま、山道の獣道を歩いた。

緩やかに開かれた木の根の近くに凭れ掛からせるような形にして支えていた身体をゆっくりと落とすと、改めて髪を手櫛でかき分けて顔を晒す。

年端もいかぬような顔は、白く明らかに化粧をしている……それも厚化粧とも思えるほど、眉は随分と高い位置に薄く引かれ、唇は中心部のみ紅が乗せられただけで、全体的にはのっぺりとした顔。着ている服は一体何枚着こんでいるのかと思うほどに、色とりどりの襟が幾重も見えており、袷が開いている。

魔族が住まう世界とは明らかに、異郷の地で、異文化と言える。

「……ん、っ」

僅かに、女が呻いた。

気が付いたのだろうか、ガレリウドは覗き込む。

異郷の地で会った娘が、声の主であるかどうかを確認するために、色々と問わねばならない。

薄く開かれた瞳は切れ長で、ぼんやりとしている。

「気が付かれたか」

言葉が通じるかどうかまではわからないが、ガレリウドが声をかけてみると、女の視線と交錯して一瞬の間が合った後。

「きやあつ——！」

甲高い悲鳴をあげられて着ていた衣服の長い袖で顔を隠された。思わず、ガレリウドも目を瞠る。

それほどまでに吃驚されるとは思っていなかったが、だがこの娘の異文化感たつぷりの風貌では、ガレリウドの軍装姿というのは、この世界ではミスマツチなのかもしれない。

悲鳴は一瞬だったが、甲高いそのトーンは聞き覚えがある。

「あの声は、そなたであつたか」

再び声をかけたが、娘は袖で顔を隠したまま頑なに身体を縮こまらせた。

上から真つ逆さまに降ってきたにしては、随分とまた臆病者である。

足を滑らせて転落したのか、それとも突き落とされたのか、どちらにせよ低い文明レベルでは娘に空が飛べるという理屈は通りそうにない。

娘の悲鳴が大きかったせいか、頭上では騒がしい足音が土を鳴り響かせている。

「言葉がわかるのであれば、何か申してみよ。そなたは願ったのだろっ、『助けて』と。――形は違いかもしれぬが、死ぬ手前では『助かった』はずだ」

ガレリウドがゆっくりと言葉を向けると、娘の袖口で隠す顔が僅かに動いた。

ぐしゃぐしゃの黒髪が斜めに傾き、首が傾げられたような仕草。それでも顔を隠したままというのは如何なものか。

怪訝に表情を向けるが、恐らくガレリウドの表情など見えていないだろう。

そして、漸く空から落ちてきた娘が口を開いた。

「……わたくしは、死ぬことが出来なかったのですか？」

それは、ガレリウドを誰かと問うような普通の問いではなく、助けた御礼とも違う絶望の声。

どうやら言葉はわかるようだ。と、ガレリウドは心内で安堵する。彼の抱える愛妾の中には言葉が通じない者も居るために、コミュニケーションをとるのにとっても苦労するのだ。

「死にたいと願うのであれば、殺せなくはない。だが――」

そう、ガレリウド自身はこの脳裏に流れてくる声の主を探して、気の滅入る声を消したいのだ。

だから、願い通りに助けてほしいなら、助けて解決する。殺してほしいと願うなら、殺して声が聞こえなくなることを望む。だが、彼が殺すのは己が仕える侯爵閣下に仇なす敵のみ。

レヴィンのように、罨をもって敵味方関係なく無差別に殺すという美德は持ち合わせていない。

殲滅將軍と異名をとるが、己の信念を曲げることはない、魔族の

中でも戦いに美徳を持ち込む変わり者だった。

「――だが、何ゆえに死にたいと願うのか聞かせてみよ」

6・理由

相変わらず女は袖で顔を隠したままだった。

面と向かって話す習慣がない、ということをガレリウドは理解出来ない。

だが、それは異国の娘ということで、隠す袖を払いのけてしまいたい衝動を抑える。

「そ、れは……—」

答えようと口を開きかけた娘だが、言葉は紡がれることなく、衣擦れの音だけが風と共に流れた。

ふるりと、長い黒髪が左右に揺れて、着ぶくれした肩の辺りも震えている。

どうやら泣かせてしまったらしい。

これだから、女の扱いというのは難しい。

泣いたかと思えば、次の瞬間には笑っていたりする場合もあるから、注意が必要と、この長き生の中で知っている。

どうしたものかと困惑していると、聞こえていた足音が大きくなってきた。

「中宮さま？　中宮さまー？」

甲高いトーンの声は、異世界に降り立った折に聞こえたものだ。この娘を探しているのか、追われているのか、はたまた別人か。

「——殺して、ください」

「なんだと？」

理由を聞いているのに、切羽詰まったように告げられる。それだけで、あの声の主には見つかりたくないということなのだろう。

面倒だとは思ったが、無暗やたらに殺す主義のないガレリウドは、周囲に手を翳した。

掌から煙状のものが噴き出て、形を形成して徐々に具現化する。それは幻影とも呼ばれる下級魔術の一つで、何ら害のないものだが、文明レベルの低い手合いには脅威的なもののように見えるだろう。

大きく具現化したのはグリフオンの翼をもつ獵犬、グラシヤラボラスと悪魔の中では呼ばれている幻影。

「これで邪魔立ては入らぬだろう。理由を聞いているのだ」

レヴィンのように冷酷なものなら、さっさと殺しているのだろうな。

我ながら気の長い面が己にもあるものだと思いますながら、再度問う。

「……つく、……お聞き、くださるの、ですか？」

しゃくりをあげながら問われる。

そのまどろっこしさは、何とも形容しがたい。

意のままに、さっさと言えとでも剣を突き付けても、この娘は恐らく言わないだろう。

それよりも、突き付けた剣に自ら飛び込んで自害しそうなものだ。何せ死のうとして、飛び降りたようなのだから。

「聞いてやる。そなたが『助けて』と願ったのだろうか？ 断片的にその言葉しか伝わってこなかったが、死にたいと望むなら先ほどそなたが発したように『殺して』と、願うはずだ」

そう告げると、娘は吃驚したように一瞬だけ顔を上げて、また伏せてしまった。

あの脳裏に響いた声は、この娘の声で間違いはないのだ。

「願いました……。わたくしは、……道具や人形のような扱いから抜け出したいのです。唯一穏やかで居られた娘とも引き離され、その娘が亡くなったことも知った今、ただ政のために使われる道具として宮中に閉じ込められ生かされるのは、嫌なのです」

ようやく娘が理由を話し始めた。

だが、やはり異世界。

言葉の断片から全くもって理解出来ぬことがガレリウドには多々ある。

道具のような扱いを受けるのが嫌だというなら、嫌だとはつきり言えば良いはず——と、そこまで考えてから、この娘が言える立場でないのか、それとも言ったところで覆らないのかと知る。

宮中というのは、どこのことを指すのかわからないが、邸のようなものだろう。

そんな風に娘の言葉を、己のわかるような語彙に変換しながら聞く。

「そなたの意のままに生きられないから嫌だと申すのか？」

「わたくしの意志は生まれた頃より、何一つ叶わないのです。ただ、帝になる子を産むだけの道具としてだけ生かされる」

帝という単語は恐らく皇帝や王のことを示しているのか。

異文化でも、そういった上下関係はあることは多い。

つまりは、娘は子を亡くしたばかりなのに、また王の子を産む種馬としての扱いが嫌だと言うことか。

ガレリウドの愛妾でも、生まれる前に子が亡くなっている。

魔族の女でも、子を産めなかったというショックは随分大きく、宥めるのに何十年とかかった者もいるものだ。

愛妾たちと違うのは、子を産むことを宿命とされた扱いに不満だということ。

女の心理というのはガレリウドにはよくわからないが、出産に命を落とすこともあるという話は耳にする。

魔族の場合、宿した子供の魔力が強大であればあるほど、母体となる者に負担がかかるのだ。

「死すれば、状況が変わるとでも思ったのか？」

「……輪廻転生の下、この世ではない運命を望んで——」

「そのようなものはない。死すれば、無だ。肉体は滅び朽ち果てる。魂が留まるには、それなりの業がある。そなたは、見たところ年端もいかぬ身でそのような、つまらぬ理由で死にたいと願うのか？」

娘の言葉を遮ってガレリウドが続けた。

魂や肉体には永遠はなく、いつか必ず滅びる時がくる。

ただ生命の長さが種族によって違うだけで、輪廻転生が本当にあるのなら、魔族の世界など戦をする意味がなくなってしまう。

魔族は元々、忌々しき天使と呼ばれるものの派生。

墮天使と烙印を押された末の種族なのだから、輪廻転生で前世の記憶まで持つていけば元々天界は平定していたのだから、今頃天界との戦争も、魔族同士での戦乱も起こらない。

「つまらぬ……？」

「そうだ。つまらぬ。柵から抜け出したいというのなら、死なずとも生きて抜け出せば良いだけのこと。それがそなた一人の力では出来ない、だから『助けて』と願った……ということであるな？」

「……はい」

「簡単なことだ。違う世界で生きれば良い」

そう告げて、ガレリウドは娘の言葉を一つ一つ思い返す。
今まで愛妾として迎えた魔族は、出産の経験のないものばかりだった。

この娘は子が居たというからには、出産の経験がある。
帝の子を産む道具になりたくはないとは言っていたが、なりたくないだけで、なれないというわけではない。

それに、頑なに隠す顔や艶やかな黒髪を綺麗に整えたら、どうなるのか見てみたいという気にも駆られる。

妃を作って子を為せとは侯爵閣下に命を受けたが、子を為さぬ者を妃として迎えることが出来ない今、出産経験のある女というのはガレリウドにとって貴重な情報源ともいえる。

声の主を探しにきて得た収穫は大きい。

「違う、世界……?」

「条件を飲むというなら連れてやろう。飲めぬというのなら、望み通り——殺す」

それは悪魔の囁きのようにも思えるのかもしれない。

脅すような物言いだ、ガレリウドには殺すつもりなど到底ない。
飲めぬというなら、娘が飲むというまで躑ければ良いだけのことだが、彼の思いに反して娘の言葉は脳裏によみがえった声と一致した。

「……助けて、ください。この世を抜け出すことが出来るのであれば、厭いませぬ。ただ、わたくしに出来ることなら——」

その言葉に、思わずガレリウドの口角が知らずのうちに吊り上った。

7・帰還

「——我が質問にわかる範囲で答えて過ごせば良い。質問をするか
らには我が傍に暫くは居てもらうが、長くて3ヶ月だ」

まだ名も知らず、魔力の波動は感じられぬが得体も知れない小娘。
提示したのは、問答の相手になれという誰にでも出来るもの。
誰にでも出来るが、ガレリウドにしてみれば、貴重かつ目的を果
たせるかに関わる重要な問答の相手。

「それ、だけで……宜しいのですか？」

「二言はない。——条件を、呑むなら顔をあげよ」

言葉をかけると、娘は間を置いてから顔を隠す袖が下がり、目元
だけを晒した。

髪と同じ漆黒の瞳は、怯えと哀しみに満ちて潤み、肌は赤く染ま
っている。

化粧である白肌が涙の筋痕で、上げさせた顔は崩れていて、ガレ
リウドは思わず顔を見たいと欲を出して上げさせたことを後悔
した。

娘の方も、ばつが悪いと思ったのか——実際は恥ずかしさに耐え
切れなくて——また袖で隠してしまった。

「手始めに名を聞こう」

咳払いを一つ零し、ガレリウドは改めて質問を娘に投げかけた。

「……香子、と申します」

カシ。

聞きなれない、響きの名だ。

だが、短く覚えやすいと思えば、長く噛みそうな名よりも良い。

「では、香子。良いというまで、目を閉じておけ」

香子と名乗った娘が、袖を掴む手に力が込められているのを見届けると、ガレリウドは香子を抱き上げた。

気を失っていない分、先ほどよりは重みはないが、だがやはり身体肉感は感じられない。

一体、何枚着ているのかとか、何故そのように髪が長いのかとか、色々ど気になってしまう。

それらをぐつと堪えると、震えた身を抱き上げたまま、転送陣のある場に戻った。

作り出した幻影は霧散し消えかけている。

転送陣の中へ香子を抱えたまま、足を踏み入れて念じる。

行先は侯爵閣下の地ではなく、ガレリウドが統治している地で居を構える異世界。

多種多様の魔族が住まう戦乱の多い辺境地だ。

——転送は一瞬のこと。

陣の開いた先は、ガレリウドが住まう邸内の庭だ。

元々この地は、侯爵閣下の別荘として使われていた地だったが、戦場に近いたために侯爵閣下が前線を立たなくなった現在では、代わりに前線に立つことの多いガレリウドに任された領地だった。

戦場を好まない愛妾は遠く離れた地に居を構え、逆に血の気の多い愛妾は戦地に近い所に居を構えている。

「おお、今度はちゃんとガレリウドさまだっ。お戻りでしたか。…」

…困ったことが——って、なんですか、このマットレス2号は？」

魔力の波動で帰還を察知したらしい、邸内で己の代わりに留守を頼んでいた魔将の一人、金色の癖髪を揺らしたイグネルフが、困惑した顔で報告しようと口にしかけて、腕の中で抱く香子に気付いてあんぐりとした。

マットレス、と言われると確かに香子は、それぐらいの厚さがあるかもしれない着衣をしている。

声が聞こえたせいで、香子が身じろいだが、言いつけ通り頑なに目を閉じているようだ。

「一応、異国の娘、香子だ。2号とは何だ、お前はこの香子のような者を他に見たことがあるのか？」

「あるも何も、今しがたガレリウドさまが帰還なさる前に、喋るマットレス1号が邸を徘徊して困っていたところですよ。ああっ！異国の娘ということは、まさかと思いますが、また保護なさったり、懷かれて愛妾にする気ですか？」

イグネルフは声を荒げて捲し立てる。

愛妾に言うというと、こうして煩く咎めにくるのは毎度のことだ。うんざりとしながら、ガレリウドはイグネルフに首を振る。

「暫く客人として扱う。それで、その徘徊しているという者は邸のどこに？」

「エントランスです。取り押えておりますが、しきりに『チューグーさまはどこだ』としか、口にしないので」

「チューグー？」

怪訝に顔を顰めると、腕の中からその答えを示された。

「それは、わたくしのことだと思います……」

香子が口を聞けばイグネルフが、こめかみに手を当てながら「マツトレス2号もやはり喋るのか」と呟いていた。

イグネルフは少々神経質な面があるから、異文化の受け入れというのは時間がかかる。

フェンリルの血が混じる娘を保護した折も、イグネルフは魔獣を拾ってくるなどと愚痴を零しては、深き森に娘の住まいを造らせるまで近づかなかった。

何でも過去にフェンリルの子供に外套を台無しにされた以来、嫌いだとか。

それはともかく、異世界で幻影を見せていた間に、香子を知る者が転送陣に紛れ込んだのか。

だが、魔力を持たないものが転送陣を扱えるとは思えないのだが、あの異世界にも魔力を持つ者が居たということだろうか。

ガレリウドは香子を地に下ろすと、目を開けても良いと命じて手を引いた。

後ろからイグネルフも、相変わらず「マツトレス2号が歩いている」とぶつくさ文句を言いながらも、ついてくる。

「香子。チューグーとは何だ？」

庭園からエントランスまでは暫く距離がある。

手を引く間、香子は反対側の手で顔を隠している。

これはもはや癖なのだろうか、とガレリウドは思ったが後でまた質問することにしようと決める。

「帝の妻の呼称です……。わたくしの国では皇后、中宮、女御、更衣と位があり、名で呼ばれることは少ないのです」

「ふむ。……随分と、複雑そうだな」

これは理解するのに、イグネルフではないが時間がかかりそうだ。エントランスの前まで来ると、押し問答と思わしき声が響いている。

そのトーンは、幻影を見せるきつかけになった声でもあり、異世界に降り立ったときに初めて聞いた声でもある。

これを聞いたときに、殺してくれと願ったのは香子だ。

「さて、心当たりはあるだろうが。……つまみだせと願うなら、あの異世界に戻してくるが——」

「……琴式部。わたくしの身边を世話する者です。あの……お邪魔でなければ、一緒に置いてくださいませ。今、わたくしの国に戻したら、あの子は宮中を追われることになると思うのです」

「それはなりません！ 得体の知れないマツトレスが2つも徘徊されるなど、邸の景観に関わる上に、伯爵ともあるう方が——」

「わたくしからすれば、あなたも得体の知れないものです。そのような酷い寝癖をつけた髪で渡り歩くなど、はしたない」

怪訝を露にしたイグネルフに対し、香子が言い返した。

泣いたり願ったり、悲観的な面しか見ていないが、意外なものだ。

「なっ……ッ、この髪は元々こういう髪質で……一体、何なんですか、マツトレスの分際で。ガレリウドさま、この小娘を置く理由を後でじっくり聞かせてもらった上で、不要とあらば私が異世界に送り返して——」

「イグネルフ。お前は少し黙っている。この件は私の独断で決めたことだ。決定権は誰にあるかわかるだろう？」

イグネルフはまだ腑に落ちない様子だったが、エントランスの扉を黙って押し開けた。

そこには、香子とよく似た衣服を身に着け、長い髪を垂らし、扇で顔を隠している娘が背筋を立てて正座したまま、邸内で働く魔族の文官たちに囲まれていた。

娘の周りは移動と魔力封じの陣が敷かれて、陣の外に出られないような簡易の魔術だ。

捕えたというが堂々とした座りっぷりに、文官たちも困り果てている。

「中宮さまっ!？」

扉が開いたことで、扇で顔を隠していても、その隙間から覗き見たのか声が響いた。

「香子。そなたの知り合いに相違ないのだな」

「はい。……琴式部に間違いございません」

「この者らは『客』だ。陣を解いて各自の持ち場に戻れ」

命令を下すと、文官たちの揃った返答と共に琴式部と呼ばれた娘に敷かれた陣が消えた。

8・再会

陣が取り払われたことで、琴式部が動けるようになると、香子がすぐにでも膝をついた。

「式部……。ごめんなさい」

「何を謝るのですか？ さあ、中宮さま。帰りましょう」

当然とばかりに、琴式部が香子の手を引いて立ち上がらせた。けれど、香子は動かない。

怪訝そうに振り返り、琴式部は首を傾げた。

「わたくしは……帰りませぬ」

「えっ？」

「ですから、宮中には帰りませぬ。この方に、お願いをしたのです。宮中から出られるようにと――」

この方、と指示されたガレリウドは一瞥しただけで何も口を開かなかった。

ただ、どうするのか、事の成り行きを見守っている。

それにしても香子も、琴式部もやはり顔を隠したまま会話している。

全くもって不可解な会話法であるが、それが異文化の作法なのだろうと無理やり納得するしかない。

「ですが、春宮さまからの文はどうなさるのですか？ せっかく、弘徽殿にまた戻って、今度こそ国母になれることが出来るかもしれないというのに」

「宮中に、……弘徽殿や中宮としての未練などありません」

「では——どうするおつもりですか？」

「自害しよう……した折に、この方に助けて頂きました。暫くはこの方のお相手をして、それから決めます」

行き当たりばったりで良いのかとばかりに、琴式部がため息をつく。

だが、次の瞬間には意を決したように毅然として――。

「中宮さまを一人にしておくわけには参りません」

「わたくしも、式部には助けてもらいたいと思っております」

「はあ……。貴女という方は、本当に破天荒な中宮さまですね。それで一体、ここはどこで、中宮さまを誑かしたのはどなたですか？」

何とも切り替えの早い様子で、琴式部は矢継ぎ早に質問をしてくる。

その答えについては、香子も知ることではなく、やや困ったのか扇越しにチラリとガレリウドへと視線を移している。

「このような所で立ち話をする気はない。ひとまず、ついて来ると良い」

ようやく、言葉を発したガレリウドは後のことをイグネルフに任せるようにすると、エントランスから延びる螺旋階段を上る。

このような建物を見るのもおっかなびっくりといった様子で、香子と琴式部が続いた。

衣服の裾を踏まないようにと慎重になっているせいか、その足取りはとても遅い。

衣服の重みもあるのだと思うが、階段を上りきつてもゆっくりとしか歩かないのだから、ガレリウドは抱きかかえた方が早いのではないかと思ったほどだ。

入り組んだ廊下を歩き、客間として使われる一室へと二人を案内した。

異文化では、生活様式も随分と違はずだ。

ガレリウドは邸内で働く女性の小間使いを数人呼ぶと、香子と琴式部を客として扱うように言い、まずは疲れているだろうと湯殿の準備をさせた。

「慣れぬだろうが、全てこの者らに任せておけば良い。落ち着いたら話が出来るように取り計らう。それまで、少し休んだ方がよかるう？」

琴式部に至っては、恐らく邸内の魔將に狙われそうになったであろうし、移動封じや魔術封じの陣を敷かれていたのだから、身体への疲労や負担は多いはず。

タイムリミットは3ヶ月であるが、まだそれは時間がある方なのだ。

香子と琴式部が休んでいる間に、口うるさいイグネルフへも言い含めなければならぬだろう。

侯爵閣下に受けた命によれば、暫く戦場には行けないということだから。

つまりそれは、文官が受けるような面倒くさい領地の内政に励まなくてはならないという示唆。

やれやれと息をつきながら、香子と琴式部は小間使いに任せて、ガレリウドは私室へと戻った――。

9・宵め

「それで、ガレリウドさま。あのマットレスをいつまで置いておくのですか？」

私室に戻ると早速とばかりにイグネルフが問い詰めてきた。

執務用の机に、ゆったりとしたソファート、天蓋のついたキングサイズのベッド。

本来ならもう少し小さな部屋で、眠るだけが目的とした部屋で良いとガレリウドは主張したが、イグネルフが伯爵閣下の私室が粗末な部屋では示しがつかないという理由に押し切られ、調度品は飾り立てず必要以上の家具を置かないと譲歩した上で、使っている私室だ。

戦いの権化であるガレリウドは、戦場に行かない間の過ごし方といえ、領地内の争いを治めるとか、領地内を便利にするために建設している建物などの査察に訪れてみたり、嫉妬深い愛妾の様子を見に行ってみたりと、邸に居ることは少ない。

それでも邸を疎かにするわけにも行かず、イグネルフを始めとして腹心の魔将や、使用人を置いてはいるが、伯爵邸としては魔族の中でも最も簡素な邸となっている。

ガレリウドは執務机に供えられた柔らかい背凭れのあるリクライニング式の椅子へ身を沈めて、対面で立つイグネルフを諭すように口火をきる。

「マットレスではなく、香子と……、琴式部というそうだ。ひとまず、三ヶ月は置く。侯爵閣下に妃を娶って子を為すまで、戦場には出さぬという命令を下された。その期間が三ヶ月だ」

「妃……ですか？ まさか、愛妾ではなく、あのどちらかを妃に迎えると？」

「そうではない。侯爵閣下の邸で香子の希求の声音を聞こえた為に答えただけのこと。それに――香子は、子を為したことがあるというから、参考になることが聞けるかもしれぬだろう。イグネルフは腑に落ちないだろうが、私の愛妾が子を宿しても産み月になる前に子が死んでしまうのは何故だと思う？」

魔族同士の子孫繁栄はそれほど難しくはない。

それゆえに、異なる種族の魔族が交わったりして、混血が広がり新しい魔族が増え続けている。

純潔の魔族というのは少なくなってきた。

戦災孤児でガレヴァーン侯爵に保護されたガレリウドは、己自身がどのような魔族であるかは侯爵によって聞かされていた。

魔族の中でも、魔王と呼ばれる種と人間の間に生まれた混血種。

内に秘める魔力は大きく、母体となった人間の母はガレリウドを産み落とした後は、床に臥せたまま衰弱して亡くなった。

実は人間との混血は魔族の貴族の中では、あまり好ましく思われてはいない。

ガレリウドに爵位を授ける際に、ガレヴァーン侯爵がガレリウドの出生を調べあげて、その事実が表向きは伏せられている。

歳を重ねるごとに、力は肥大し、実力だけであれば公爵に並ぶ。

だが、その力を利用して権力に溺れるわけでもなく、伯爵に留まって保護したガレヴァーン侯爵の下で仕えることや、戦場で出会う迷い子のような孤児を拾ってきてしまったり、愛妾として置いたりするのは人の血が流れているからかもしれない。

「はあ……。それは、何とも奇妙な話ではありますが。貴族の中では、ガレリウドさまの魔力が強すぎるのではないかとか、相性が合わないのではないかと言われているそうですが」

イグネルフは、もそもそと口ごもりながら答える。

本心ではあるが、主であるガレリウドに自分の意見として告げるのは口幅つたいと思ったのだろう。

だから「貴族の中では」と、あくまで風の噂というように言葉を濁した。

「我とて理由がわかれば数千年も放置せぬわ。だから聞くのだ。経験者に――」

「それなら、初めから他の子を為した侯爵閣下や、伯爵……ああ、レヴィン殿などに話を伺えば良かったのでは？」

「イグネルフ。そのような無粋を侯爵閣下や、レヴィンなどに聞いたら、からかわれるのは目に見えているだろう。自尊心などはないが、女のことを聞くなど我の性に合わん」

それを自尊心というのではないだろうかと、イグネルフは首を傾げそうになったが、口を慎んだ。

三ヶ月、何も変わらなかつたら、あのマットレスたちがこの邸から消えるのであれば、三ヶ月は我慢するしかない。

やれやれと嘆息したイグネルフは、「お好きなように」としか答えることが出来ない。

だが、それでガレリウドに妃が出来るなら、次々と愛妾を拾ってきたり、子供を拾って来たりすることは少なくなるだろうか。

そんな風にも考えが及ぶと、イグネルフはこれまた複雑な心境になるのだった。

「全く、ガレリウドさまという方は、本当に変わった方だ」

「……ふむ。その物言いは、先ほどの琴式部とやらに似ておるな」

「なッ――、あのようなマットレス1号と同列にされるなど、不愉快です！」

今度はガレリウドが嘆息する番だった。

どうやらイグネルフが、「香子」と「琴式部」をそのままの名で呼ぶのは時間がかかりそうだ。

イグネルフの中では、「香子」はマットレス2号、「琴式部」はマットレス1号となっている。

逆にその方が呼びにくいような気がしたが、恐らく認めるまでそのままであることを、ガレリウドは嫌というほどよく知っている。

「ともかく、邸を勝手に追い出したり、愚弄することは許さぬ。聞けば香子は高貴な身分のようだからな、客人として扱え」

ガレリウドが締めくくると、イグネルフは渋々と承知してガレリウドの私室を退室した。

室内に残ったガレリウドは、もう一度大きく嘆息した。

香子は魔力を感じられず人間の匂いがした、同じ人間の血が流れるガレリウドにしてみれば半分は同類なのだ。

脳内に響く希求の声は殺さずして、手元に置くなど初めは予想もしていなかった。

これがどうして邸まで連れてきてしまったのか、問答の相手とするなら数日で済むことに違いないが、無性に気になった。

それが何故なのかはガレリウドには、まだわからない。

ただ、興味が湧いたにしては、戦以外のことでは珍しいものだ。

「やはり、顔を隠すから暴きたいと思うのだろうか？」

逃げるものを追いたくなったり、秘めるものを暴きたくなる衝動は誰にでもある。

一人呟くが、ガレリウド一人しか居ない私室には、その問いに対する答えは何も返ってこなかった。

10・問答

香子を客人として迎えて三日が過ぎた。

実に、この三日、文化が違いすぎて苦勞したものだ。

食事を出せば、ナイフとフォークの扱い方がわからず、食べ物だと言っても中々理解されなかった。

結局、スプーンだけで、様々な種類をほんの少しずつ口にしなければである。

後から聞けば、それが雅な食べ方だということらしい。

気にせず好きなだけ食べれば良いと言い含めて、なるべく食事の出す量を減らすようにしてからは、器に残ることはなくなった。

着の身のまま訪れたこともあって、こちらの文化に慣れるまで困るからという理由で、一度異世界に琴式部だけが必要な荷物を取りに戻ったことがある。

荷物の中には、イグネルフが嫌がっている分厚い服——唐衣裳束というらしい——や、恐らくあの長い髪を手入れするものと思われる薬品などが持ち込まれた。

転送陣を香子が住んでいたという藤壺の間に開いたために、人目につかず騒ぎにはならなかったようだ。

顔を隠すという文化は、相変わらず理解出来なかったが——。

本来なら声を聴かせることすら、香子の場合は滅多にないという琴式部のような女房と呼ばれる侍女が、全て代弁して世話をし、声や姿は肉親や夫のみが知るもので、普段は御簾と呼ばれる薄いカーテンのような壁越しであるとか、直接会っても顔を見られることは恥じらうものだとか、説明をされたが全くもって面倒なことである。

結局、問答をするにも、扇で顔を隠されたままであった。

「——この三日、そなたの文化のことばかりを問うてばかりだった

が。今日は別の問いをしたい」

「はい……」

「そなたは子を為していたそうだが。子を無事に産むに当たっては、気をつけねばならぬことなどあるのか？」

「はい？」

問答をすると称して、私室にソファーに座らせてから聞いた問い。香子は吃驚したように首を傾げるような仕草が、長い髪が傾いたことで知れる。

「あ、あの……ガレリウドさまは、その……。御子を授かっていらっしゃるお方様が、いらつしやるのでしょうか？」

「居た。というべきだろう。産み月になるまえに全て流れてしまっ
が——」

「申し訳ありません……」

何故、そこで謝るのかはよくわからない。

ガレリウドは気にしなくても良いとばかりに、首を振る。

扇の隙間からガレリウドの仕草は見えるようで、小さく縮こまったような香子がおずおずと続けた。

「わたくしの国では、出産は『穢れ』と言われ宮中から宿下がりをして、出産の間までに祈祷をして物の怪を寄り付かせぬように致しております」

「物の怪、だと？」

「はい。出産までにある不幸は全て物の怪の仕業で、祈祷が足りない」と物の怪に命を奪われるそうです」

人の世界での出産は命がけとはよく言ったものだが、文明レベルの発達している時代ではそうでもないと言う。

だが、魔族にそれが当てはまるかというと、——当てはまらない。祈祷などというのは、忌々しくも神頼みということになる。宛てが外れたとばかりに嘆息したガレリウドは、頭を抱える。

「他にも、冷えや服毒でも子が流れることがあります。ガレリウドさまは、わたくしたちのような人間ではないとお伺い致しましたから、物の怪を倒してしまわれるのであれば、そういった理由からかもしれません」

嘆息したガレリウドに、香子が付け足すものの、あまり役に立ってなかったとばかりに香子が沈んだ。

結局のところ、ガレリウドが抱えている謎は解明されない。だが、香子を三ヶ月は邸に置くと決めた以上は、野放しに出来ない。それに――。

「貴重な答えだ。我はそなたの数千年以上も生きているのに、そういったことには疎い。それに、そなたの文化や意見には退屈な時間ばかり過ごしていた我に、新鮮な風を巻き起こしてくれている」

普段なら、三日も邸に籠っているということとはあまりしない。が、気になって邸に籠っているというのは、ガレリウド自身が知っている。

イグネルフからは、査察の予定や、溜まった書類をどうするのだとせっついてきていた。

生活に慣れるまでは後回しにすると聞いたせいで、イグネルフの機嫌はすこぶる悪い。

「……邸内には、まだ慣れぬだろうが。もう少ししたら、邸のことはイグネルフに任せて、出掛けねばならん」

「どうぞ。お構いなくお仕事を優先なさってくださいませ」

まだ異世界にきて三日で不安もあるはずだというのに、随分と健気だ。

控えめに、慎ましくが雅とするように育ってきたというから、我儘を言うこともない。

侍女の琴式部が、香子を思っで時折イグネルフを通して要望を出してきているようだが、香子に「必要なものはないか？」と気を遣って聞いても「何もありません」と返されてしまう。

イグネルフが琴式部に頼まれた物を届けさせれば、香子はしきりに御礼を言うので、「マツトレス2号の扱い方は更にわからん」と憤怒していた。

「邸内だけでは退屈かもしれぬが……。困ったことがあればイグネルフに全て申し付けよ」

「はい……」

そうは言っても相変わらず、何も要望は言わない。

琴式部が居なければ、本当に何もいらなうと言いそうで、生活出来るのか怪しいほどだ。

そういつた意味では、転送陣にうっかり足を踏み入れたばかりか、香子の下に行きたいと願った琴式部が異世界でも一緒というのは、香子にとっては良かったのかもしれない。

11・要望

伯爵閣下の「拾い癖」には困ったものだ。

とにかく、戦地で困っていたり、侯爵閣下から押し付けられたりすると、どのような女であれ拾ってくる。

男を拾うときもあるのだが、それは配下の魔将として役に立つが、女は特に戦を好む種族であっても面倒くさい。

伯爵閣下が拾ってくる女、そのほとんどはガレリウドさまの伯爵という地位に目を光らせて猫を被ったものであったり、戦を好まない妖精の子供であったり、忌み嫌われるハーフェルフであったりと、碌なものが居ない。

愛妾という立場を利用して出してくる女どもの要望を聞いていたのでは、身体がいくつあっても足りない。

何せ27人も、居るのだから。

そのくせ、正妻として傍に置いている女も居ない。

こうなつては、いつまでたっても拾い続けてくるのではないかとイグネルフは危惧した。

27人目の愛妾を迎えた二千年前に、「これ以上は拾わないでください」と釘を刺したのだが、時が経つとそういったものは忘れ去られるのだろうか。

侯爵閣下の領土へ突然出かけられた後、帰ってきたと思ったら、また女を拾ってきたのだから。

「中宮さまは退屈なさっております」
「は？」

伯爵閣下より承っているイグネルフ専用の執務室に、マツトレス1号が突然入ってきたかと思うと、意味のわからないことをのたまっている。

このマットレス1号は、2号の侍女だというが、侍女の分際でイグネルフに要望を出してくる迷惑な娘だ。

主人にあたる2号から、直接頼まれたでもないのに、やれ櫛が欲しいだの、香を炊く草が欲しいだの、魔族の世界にはないものを頼んできたりするから、一度異世界に返して必要なものを取りに行かせたのだが、短時間で荷物がまとめられるわけがないと言う。

「何を用意しろと言うのだ」

「木簡を……。文字を書きつけるものがあれば」

「紙のことか？」

イグネルフの執務机には書類とした紙が大量に積まれている。

その書類にチラリと目線がいったのが、マットレス2号の持つ扇とやらが動いて嫌でもわかる。

それにしても、紙が欲しいなどとは……。一体、何に使うというのだ。

「紙は貴重なものでしょうから。ただ使いさしでも頂けるのであれば……」

いつもは強気であれが欲しい、これが欲しいというマットレス1号だったが、今日ばかりは何故かしおらしい。

紙が貴重なものとは……。意味がわからん。

ゴミ箱にくしゃくしゃに丸めて捨てた紙が多々ある。

それらを羨ましげに見るというのは、何とも……。異世界から来た高貴な身分の娘としては、疑いたくなるほどみずばらしい。

「わかったわかった。後で届けるから、部屋で大人しくしている」

紙ぐらいなら、伯爵閣下にし立てなどしなくても構わない気が

したが、マットレスたちの世話は伯爵閣下の私財から賄うために、要望があれば伯爵閣下にお知らせすることになっている。

領土からの税金で賄うなどあつてはならないから、当然だ。

マットレス1号を執務室の外に追いやると、溜まっている書類に目を通した。

今までで、一番くだらない要望だな。と、イグネルフは脳裏で思った。

午前中に書類を全て目を通し終わると、この書類の束は伯爵閣下に送られて、承認が得られれば案件が通るようになっていく。

その書類を抱えて、ガレリウドの私室へと向かった。

ノックをし、許可を頂いてから、質素な私室に足を踏み入れる。

この頃は、マットレス2号が伯爵閣下の私室に居ることもあるため、顔を合わせたくもないイグネルフはこのノックで中にマットレス2号が居ないか確認している。

もし中に居たら、ノックの後にマットレス2号が退室してくるからだ。

音一つで追い出せるというのは便利である。

「今日の分の書類です」

「ああ、ご苦労」

「それと。……マットレス2号が、要望を出してきています」

「ふむ。香子に困ったことがあるなら、全てお前に言うようにしたからな。それで、何を頼まれた？」

伯爵閣下はこの頃、マットレスたちの要望を面白がりながら聞いている節がある。

27人の愛妾の要望には、冷たい声で「言うとおりにしてやれ」としか命令を下さないが、マットレスの言うことは要望が何か、何

に使うのかまで興味を示して執着されている。

「紙が欲しいそうです。文字を書きつけたいとか」

「紙……？ そのようなもので良いのか？」

この反応は、イグネルフが最初にした反応と同じだ。

だが、伯爵閣下は、そういえばと、何か思い当たる節でもあるのか考えこんでしまわれた。

あのマットレスの要望で伯爵閣下を考え込ませるとは、ただの紙ではないということなのか？

イグネルフは首を傾げながら、ガレリウドの言葉を待つ。

「香子の世界では紙は高級のものだったと聞く。精製技術が高くなかったのだろくな。良いではないか、紙ぐらい。様々な種類のものを集めて、ついでにペンやインクなどの筆記具もつけてやれ」

「はあ？ ですが、ガレリウドさま。書くものを与えて、敵対している者に手紙など送られたりしないかと——」

「構わん。そもそも香子の書く文字は、我らが使う文字とは違うではないか。誰がそれを解読出来るというのだ？ それに、この世界に我以外の誰が香子を知っている？」

確かに、あのマットレスどもは、文字が読めなかった。

会話は出来るが、それは此方側が会話出来るようにと魔術を使っているからに過ぎない。

「すぐに手配させます……」

渋々と承諾すると、ガレリウドの私室を退室した。

あのように楽しそうな伯爵閣下を、戦以外で見るのも珍しい。

と、イグネルフは自分の執務室に戻ろうとしたら、マットレス2

号が歩いてくるではないか。

ガレリウドの問答に呼ばれたのか、イグネルフに気付くと扇で顔を隠しながらもお辞儀をしてくる。

イグネルフが嫌っているというのを知っているせいか、必要以上にはマットレス1号より声をかけてくることはない。

……というより、マットレス2号はあまり声を他に聞かせるといったことはしないとか、伯爵閣下が言っていたような気がする。

「ああ……その、マットレス2号、心して聞け。伯爵閣下の許可が下りたから後で紙を届けさせる」

問答の間に、紙はまだかと催促されては、己が伯爵閣下に報告していなかったようになると思い、仕方なくイグネルフは口を開いた。そうすると、マットレス2号は吃驚したように、扇を取り落としそうになって慌てたのがわかる。

何故、そこで慌てるのか、意味不明だ。

「貴重な紙を……で、ございますか？　ありがとうございます。イグネルフさま」

その答えだけで、やはり要望として勝手に出してきたのは、マットレス1号の方だとわかる。

2号を思つてのことだろうが、マットレス1号は、もう少し警戒しなくてはならない。

何せ転送陣を魔力を持たぬ人の身で使つて、この世界にやってきたのだからな。

ただ、このマットレス2号に関しては……。

いやいや、いかんいかん。

心を許したりして、うっかり香子などと呼んでは、伯爵閣下を陥

れる者だったりしたら、私が閣下を諫めなくてはならないのだから。
イグネルフは氣を引き締めなおすと、マットレス2号の横を通り
過ぎて執務室に向かう。

すれ違いざまに、マットレス2号の横顔が見えた。

少女から成熟した女性に入る境目ぐらいのうら若い娘の顔。
ほんのりと頬を染めていたのがわかる。

やはり……女というのは、全くもって不可解な生き物だ。

12・問答2

「ガレリウドさま。こちらが注文の衣服でございます」

邸に来客——頼んだ衣服を作らせた仕立て屋が訪れた。

琴式部が、いくつか衣服を持ち込んでいたが、さすがにあれだけ嵩張る唐衣裳装束というのは、そんなに持ち込むことが出来なかった。

そのため、衣服を作る職人を使い、デザインや色目を香子から聞き出して作らせたものだ。

季節によって着る色目が違ったり、柄が違ったりするそうだ。

イグネルフはマットレスなどと簡単に言っているが、その作りや製法はマットレスよりも実に技術のいるものであると知った。

「うむ。ご苦労だったな」

「いえいえ。久しぶりに手の込んだ衣服に、楽しく作ることが出来ました。ところで、このような風変りな衣装、またどちらの愛妾をお迎えに？」

「——愛妾ではないのだが。……我が邸に身を置いている貴人にな」
「ほう……。気になって調べたのですが、この衣装は人の和の国の古い民族衣装であるようで」

「そのようだな。異世界というより、異次元より連れてきたのだ」

仕立て屋は納得したように頷く。

「愛妾というより、……使用人ですか」

「使用人は既に足りている。和国の王の元妃という身分、そのような貴人に使用人になどはせぬ」

「はあ……。まあ、ガレリウドさまの『客人』というからには、珍

しいと思った次第で。人間に着せる服というのは、余り好まないことですが、このような珍しい衣服ならば、また承りますよ」

そういうと、仕立て屋は次の仕事があるとばかりに、客間を退室していった。

残された衣服は、見事に色目や柄の美しい単が数枚。

香子は喜ぶだろうか、それとも……困惑してしまう方が先かもしれない。

ガレリウドは早速とばかりに、香子の居る別の客間へと赴いた。

ノックをすれば、その物音にもだいぶ慣れてきた様子で琴式部が扉を開けた。

琴式部は、若干きよとした様子である。

香子は相変わらず顔を隠したままのことが多いが、世話をすることが多い琴式部は、邸内に慣れてきてからは顔を隠すといったことがない。

最初は初対面というのと、得体が知れないという警戒もあったからだそうだ。

「香子は居ないのか？」

「一刻ほど前に、貴方のお部屋へ行かれたようですが。入れ違いになられたのですか？」

「ああ……。客間の方に……。だが――いや、良い。これは仕立てさせた服だ、柄や色目はそなたらの持っているものとは異なるかもしれないが、近しいものには仕上がっていると思う」

衣服の入った箱を琴式部に渡すと、琴式部は目を細めている。

「まあ。良い色目でございます。中宮……香子さまが戻っていらっ

しやったら、早速お見せ致します」

表情を柔らかくした琴式部が、箱を長テーブルへと置いた。

この部屋も、洋室のままであるから、和室のように変えてやりたいものだったが、まだそちらの調度品の仕立ては時間がかかっている。

琴式部は、香子のことを人前では中宮さまと呼ぶことの方が多いようで、もう異世界に来たのだからと香子に諫められて、どのような時でも「香子」と呼ぶようにと言われたそうだが、その癖はなかなか抜け切れないようだ。

イグネルフは二つ名があるなどと、怪訝そうではあったが、中宮の意味が妃に等しい意味であると知ると、それほど煩くは言わなくなってきた。

衣服を渡すと、今度は私室に戻るべく足を向ける。

それにしても、香子がガレリウドの私室を尋ねるといのは珍しい。

普段なら、呼ばなければ来ないものだ。

香子の世界では、男の方が女の下へと通う文化があるという。

女はずっと邸に籠りがちなのだと。

それでは退屈だからと、香子は宮中に入内しても、時折花見や寺や神社にお参りと称して出かけていたそうだ。

よくあることだったから、香子が見たと称して出かけても、自害するなどは誰ひとり思わなかったようだ。

私室の扉を開けると、香子が問答をするときにように、柔らかなソファ―に横になっている。

「香子？」

声をかけてみたが、眠っているようだ。

私室を出たのは2時間ほど前、イグネルフの執務室で書類と仕事の話をしてから、15分ほど前に仕立て屋を出迎えた。

琴式部は1刻ほど前に私室に訪れたというから、本当に一時間もこの私室で待っていたというのだろうか。

長く艶めいた髪がさらりとソファアーにしなり、眠っているせいで扇が顔から外れてソファアーの下に転がっている。

扇を拾いあげて、ソファアーで横になる香子の顔を見やる。

少女のような少しあどけなさが残る女の顔。

触れてみたいとばかりに、頬へと手を伸ばすと、髪と同じくしつとりと柔らかな肌。

不意に、その瞳がパチリと開いた。

「きゃ——っ!？」

吃驚したように、ソファアーから身を起こした香子の袖が、素晴らしい速度で顔を隠した。

琴式部と違って、顔を見せる習慣が殆どと言ってない香子には、まだ慣れるということが無理なようだ。

「すまぬ。待たせてしまったようだな」

「っ……。ガレリウドさま……。あ、あの。いつから……」

「つい先ほどだ。そなたこそ、一時間も前から待っていたのだろう?」

寝起きで頭の回転が鈍くなっている香子を宥めながら、ちょうど香子と直角にあるソファアーへと腰を下ろした。

対面で話すということが常であるが、わざと直角に座ったのはどこまでパーソナルエリアを許しているのか測るため。

「すみませぬ。……突然に、来てしまって」

「いや。構わぬ。ここ暫くは査察で出かけていたから、香子とゆつくりと話すことが出来たのは一週間ぶりであろう」

「はい……。御仕事の合間、申し訳ありません」

「良い。それで……。何か用があつたのではないのか？」

先を促すと、香子は小さく首を傾げる仕草。

「いいえ。何も……」

「は？」

「琴式部が部屋の清掃をしたので、邪魔になるわたくしが、こちらへ逃げてきたのです」

そのようなことは一言も琴式部から聞いていないが。

どうやら、勝手に抜けてきたというより、本当に逃げてきたようだ。

邸内で香子がうろつける場所と言えば、客間か、ガレリウドの私室ぐらいなものだ。

「そうか。では、暫くここに居るが良い」

「でも、ガレリウドさまのお仕事は？ お邪魔になるようなら――」

「邪魔だと思ふぐらいなら、邸になど留め置かぬ。それに、今日の分は終わったところだ」

正式には、イグネルフに書類の束を押し付けてきただけであるが、そのほとんどは領土内の収支報告の束であるから、そういった細かな集計は会計の得意な者に任せるに限る。

「で、では……。あの。わたくしが、ガレリウドさまに、質問をして
も……。宜しいでしょうか？」

「そうだな。いつも我が聞いてばかりであつた、そなたの気が済む

まで聞くが良い」

そういうと、香子がしゃっきりと背筋を伸ばして、嬉々とした様子が伝わってくる。

一体、何を聞いてみたいと思っているのか……内心で、ガレリウドも楽しみにしている。

「では、ガレリウドさま。……ガレリウドさまは、どうして——27人も愛妾がいらっしゃるのですか？」

香子の問いは、ガレリウドを数秒絶句させた。

13・問答3

「それを誰から——いや、イグネルフから聞いたのか？」

ガレリウドは額を抑えながら香子に尋ね、拾い上げたまま持っていた扇を差し出した。

香子は扇を受け取ろうと、手を伸ばそうかと身じろいだだが、中々伸ばそうとはしない。

手を伸ばせば、ガレリウドに顔を晒してしまうからだ。

既に、寝顔を見られてしまったとはいえ、自ら晒すといった行為はしたくないようだ。

仕方なく、ガレリウドはソファから立ち上がって香子に背を向けた。

扇を取ったのだろうと思われる衣擦れの音と、扇を開いた紙の音が聞こえた。

「——もう、お座り下さって良いですよ」

香子の声に、ガレリウドはソファに座りなおして、コホンと咳払いをした。

すっかり扇で顔は覆われてしまって、袖よりも無機質な扇は柄は確かに美しいのだろうが、味気ない。

扇を渡さなければ良かったかもしれないと、ガレリウドは少し後悔した。

「正確にはイグネルフさまが応対していたお客様が、仰っております」

「どうということだ？」

「イグネルフさまの執務室を通りかかった際に——」ガレリウド伯

の27人の愛妾の中でも、エンディリシカが一番魔力が強い。そうに違いないだろう」と、とても大きな声で仰っておられました。御姿は見ておりませぬので、どなたが仰ったのかはわかりません」

イグネルフの執務室に訪れて、そのようなことを言うといえば、配下魔将ではなく、別の伯爵級の魔族がエンディリシカを戦力として借りきた、ということだろうか。

エンディリシカは、ガレリウドの愛妾の中でも特に魔力の強い女で、戦となると嬉々としてついてくる変わり者だ。

実力もあるからこそ、戦への従軍には好きにさせている。

ガレリウドが任されていない戦へも、勝手に参加しているようで特にレヴィンとも親交がある……とすれば、またレヴィンがエンディリシカを借りきた可能性は高い。

「そうか……。それで我に愛妾が居ることを知ったのだな」
「それだけでなく、わたくしが最初にここへ来た折も、イグネルフさまが『また愛妾にする気か』とお聞きになっておられましたし、ガレリウドさまは御子が授かる方法をお聞きになっておりましたから、少なくともご結婚されているものでしょう」

結婚。

その単語に、ガレリウドは笑ってしまいそうになった。

愛妾の意味を、香子はどのように捉えているのだろうか。

魔族に婚姻の概念というのは、とても薄い。

人のように役所に届けを出すわけでもない、誰が誰と結ばれようとか関係ないのだ。

だが、そういった魔族にはない概念を持ち出してくる香子は面白い。

「どうして27人も居るのか、だったな……。主に9人は迎えた当

時身寄りのない子供や忌み嫌われた女、9人は戦がしたくて溜まらずついてきた女、9人は侯爵閣下に宛がわれた番い候補や手に負えない戦好きの女だ。行き場のないものを保護して置くには、それなりに理由がなくては置けないものたち故に、私の『愛妾』として置いている」

「——無理やり、置いているわけでは……ないですね」

「中には『愛妾』と言いながらも独立して生活している者も居る。数千年も経てば、形として置いても廃れるものだ。——ただ、それを利用しようとする者も居るのも否めないが」

時折、様子を見に行くものも居れば、全く見ていない者も居る。愛妾と言いながらも、そこに普遍的な「愛」は存在しない。

「しかし——意外だな。香子がそのようなことを聞くとは……」

側室として愛妾と同義の身であったから、気になったのだろうか。もっとも、香子は中宮としてまで帝の寵愛を受けた身であるなら、愛妾の不憫さというのものも知っているからか。

そう考えていたガレリウドだったが、香子の答えは意外なものだった。

「以前にガレリウドさまが、わたくしの伴侶のことをお聞きになったから、反対に聞いてみただけでございます」

中宮の意味がよくわからなくて、詳しく聞いたことはある。

政略結婚として結ばされた香子にとって、帝という伴侶はただ子孫を残すための道具のような扱われ方であったとか。

「聞いて面白いものではないと思うが……」

「いいえ。ガレリウドさまと、わたくしは誰かを愛することを知ら

ずに、伴侶を迎えた同士ということがわかりました」

またガレリウドが咽そうになった。

女というのは、どうしてこう……愛だの、恋だのという話になると花が咲くのだろうか。

顔を晒すことは恥じらうのに、この手の話は随分と強気なことだ。ほんの少し意地悪をしてやろうと、ガレリウドは香子を困らせる質問をするべく、投げかけてみた。

「香子。我がそなたを愛妾にすると言ったら……どうする？ 我は侯爵閣下に伴侶を迎えて子を為せという命令を受けた後、そなたの声を聞いて邸に迎えた。この意味がわかるか？」

また道具のように扱われると泣くだろうか。

それとも、怒るだろうか。

「ガレリウドさまは、……とても変わったことを仰いますね」

「変わったこと？」

「はい。わたくしは、異国から離れることが出来るのであれば、この身がどうなろうと厭わない覚悟でおりました。ガレリウドさまが、望むのであれば恩返しができます」

「そこに、そなたの望む愛だのというものがなくてもか？」

質問するべきではなかった。

香子に惹かれていると気付いた時より、手に入れたと思って今までのように『愛妾』として置きたいわけではないのだ。

香子の答えは、ただ恩返しという身を捨てようとした自害と同じ形。

そのようなことをさせたいわけではないのに――。

「あら。わたくしはガレリウドさまをお慕いしておりますが——ガレリウドさまは、わたくしを好いておられぬのですか？」

今度こそガレリウドが咽たのは言うまでもない。

14・問答4

今、この目の前にいる女は何をのたまったのだろうか。

空耳とはいえないぐらいに、はつきりと聞こえた。

己を慕っている。そしてまた、己が香子を好いているのだろうと聞いてきたのだ。

ガレリウドは改めて香子に向き直ると、扇の下に隠れている顔をじつと見つめた。

「そなたは……我のどこを気に召したというのだ。少なくとも、助けた恩だけで好いたわけではあるまい」

「はい。——ガレリウドさまは文を書く道具や、異国の装飾品などをくださいました」

「それだけで？」

「それだけで十分でございます」

ガレリウドの目が点になりそうだった。

香子の国では、男性が歌を贈り続けて女性を口説くというのが、歌の代わりに物を贈ったと捉えたようだ。

つい先ほども、衣服を琴式部に預けてきたばかりだ。

だが、確かにどの時代でも男が女に物を贈るというのは、下心が少なからずもあるからだ。

それは色々な意味を含んでいる。

純粹に好いて贈るだけではなかったりすること、魔族の世界では多々あることだ。

そういった意味でも、香子は純粹すぎた。

「他の女にも物を与えてはいるぞ？」

「それはガレリウドさまの『愛妾』のお話でしょう。ガレリウドさ

まは、わたくしを『客』だとおっしゃいました。ただの『客』にお贈りするようなお品でしょうか？」

「生活に困らないようにするためのものであるう」

「ですが、高価なものであったり、生活には必要ではないものもあります」

「そなたが喜ぶであろうと思って贈っただけだっ！」

つい本音が出てしまった。

不意に香子が持っていた扇を畳んで、袖さえも顔から外して素顔を晒した。

眠っていたときにはわからなかった黒い瞳は、恥じらいのせいか潤んで、頬は紅潮している。

あどけない少女から脱却しつつある娘の顔つき。

誤魔化すように繰り返した問答の答えにある毒気を抜かれた。

「香子……。そなたに惹かれておることは確かだ。だが、そなたはこの世界に来てまだ数週間——」

「魔族は人間を嫌うものだと、イグネルフさまから聞きました。それをわかっていて連れてきたのは、ガレリウドさまではありませぬか。嫌う存在なら、何故助けて連れ去ったのですか？」

「っ……それは。——ええい、わかったわかった。そなたには負けたわ」

降参とばかりに肩を竦めると、ガレリウドは続けた。

「侯爵閣下に急かされてはいるが、二千年前にこれ以上愛妾を増やすなどイグネルフに釘を刺されておるのでな。好いているからとて、そなたをそう簡単に愛妾にするわけにはいかぬのだ。だが——そなたには傍に居てほしいと思う」

「いいえ。その答えだけで十分です。これは問答、なのですから……」

…お答えを頂いただけで、十分なのです」

再び、香子の扇が開かれた。

だが、顔を隠されることはなく、ぱたぱたと仰いでいるのみ。

まるで、気にしないようにとでも手を振られているようなものだ。表情には哀しみがあるわけでもなく、漆黒の瞳は何を考えているのか色を全てシャットダウンしている。

「質問はまだ終わりじゃないですよ、ガレリウドさま。わたくしがこの世界で生きる上で、知らねばならないことが沢山ありそうですから、お答え頂かなければ困ります。稚児でもわかるように説明なさってくださいましね」

何か吹っ切れたような物の言い方。

香子は続けて、この世界の仕組みや、魔族について事細かに聞いてきた。

異世界に、馴染もうとしている。

それに答えてやらねばならないだろう、香子連れてきたのは、ガレリウド自身なのだから。

全く、見ていて危なっかしい娘ではある。

物を贈ることの意味を疑うこともせず、ただ純粹に受け止める。

「あの声に答えたのが、我でなければ、そなたは利用されていたかもしれないな——」

「？ 何のことですか？」

「いや——何でもない」

ガレリウドは小さく苦笑すると、香子の質問に次々と噛み砕いて答えることにした。

ただ一つ、変わったのは香子を客としての扱いではなく、寵愛を

傾けられる者としての扱いに変わったこと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3057y/>

黒伯爵の妃

2011年11月24日21時53分発行